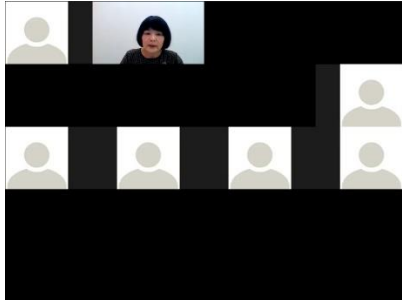


開催地名：東京都稲城市	
開催日時	令和3年2月26日（土） 10:00～11:30
開催場所	町田市役所 3階 会議室
語り部	大内幸子 （宮城県仙台市）
参加者	稲城市消防本部防災課、稲城市自主防災組織（49組織） 約60名
開催経緯	本市は、自主防災組織が49組織結成されており、避難所の設営運営に関する訓練については定期的に実施しているところです。しかし、1～2年で役員交代となる組織が大半であることから、継続して避難所設営運営訓練を実施し、地域の市民や自主防災組織等が、自らの地域の避難所を設営運営するという意識の向上に取り組むことが必要です。 また、昨年より新型コロナウイルス感染症が流行し、市防災訓練において自主防災組織が避難所における感染対策を講じた訓練を実施しました。 今後、感染対策を踏まえた避難所設営運営において更なる意識の向上を図る必要があります。
内容	（1）福住町における自主防災組織発足の経緯 「自分たちの町は自分たちで守る」を合言葉に日本一災害に強い町内会を目指すことになり、できるだけ行政に頼らない地域力、町内をあげての災害対策として始めている。 災害のときに名簿がないと誰が被災しているかもわからないので、最初に要支援者の名簿作成や住民全員の名簿作成に取り組んだ。災害時相互共有協定を締結し、お互いできる範囲内での支援と交流、防災訓練に行ったり来たり施策をしたり、顔の見える関係をつくっていた。 公助にも限界があり、公助も一緒に被災してしまうので、公助が来る間にどうするか、お互いに助け合う自助共助の取り組みが重要であることを教訓とし、男性主体の避難所運営よりも女性のリーダーがいればもっとスムーズに避難所運営ができたのではと思い活動を発足した。 （2）東日本大震災時の記憶 3月11日被災時に訓練どおりに要支援者の安否確認を30分で終わることができた。普段から4～5人ぐらい要支援者の見守りをしていたので、名簿がなくてもすぐに駆けつけることもできた。 避難所の開設を始め、小学校の避難所は2,000人近く避難者が殺到したため、立ち後れたが、町内では暗くなる前に炊き出しの準備をし、公園に手作りのトイレや災害時がれき置き場の設置を訓練どおりにすぐに始められた。

	(3) その後の地域防災活動 久住町で 2003 年に自主防災組織ができ、次の年に新潟中越地震がおきた。自分たちでできることがないか回覧で支援金や支援物資を集め、夜中の 12 時に出発した。車やトラックに支援物資やいろいろなものを積んで新潟県小千谷市池原地区へ支援をするために向かい支援させていただいた。東日本大震災時は池原地区からの支援をいただいた。小千谷市の方たちが「7 年前のご恩を忘れません」と駆けつけてくださり、支援物資をいただけることになった。 また防災訓練を 1 年に 1 回行い、その 2 カ月前に班長が班の確認と更新を行うことになっている。地域の名簿を充実し、地域の中での見回りの体制が生まれている。地域住民が自分ごととして、防災・減災を考えられるようにして、ボランティア活動や夏祭りやイベントで住民のコミュニケーションの構築を共に図っている。 仙台市地域防災リーダー (SBL) という組織があり、この組織設立の効果は、自主防災組織の必要性和重要性が震災によって明らかになった。災害の規模が大きいと行政も大きな影響を受ける。そのような場合には自分たちの町は自分たちで守り、自分の命は自分で守る意識が重要だ。地域防災、自主防災のサポートとして、SBL の要請が始まり、地域防災力の強化につながった。 また防災減災活動の報告をするために仙台防災 SBL ラジオを立ち上げ、各地域、各地区の SBL たちがどんな活動をしているか、仙台市民の皆さんにこの防災減災の大切さを広げるためにいまだに行っている。災害があったときは白い旗をたて安全をお知らせすることも行っており、このような地道な活動が災害時に大きな効果を発揮することをお伝えしたい。  
開催地より	講演を通じて防災は常に危機意識を持つことが重要であると感じた。災害時の安否確認の方法について考えたい。